

村上春樹「海辺のカフカ」について：身体という視 角から

黄, 英
中国海洋大学：助教授

鄭, 国兵
中国海洋大学大学院：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1456050>

出版情報：Comparatio. 17, pp.94-106, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

村上春樹「海辺のカフカ」について

——身体という視角から——

黄 英

鄭 国兵

一 身体という視角について

「もし身体の意味について、物質的な次元がなくなると、我々はどうしてよいかわからなくなる。」とジュディス・パトラが指摘したように、「身体」の意味の中で最も根本的なものは「肉体」である。それがもたなくなって、身体が生まれた。「肉体」から、ポストモダンの「場」(place)としての身体へ、人間の「身体」に対する認識もだんだん深化していく。

思春期少年を主人公にして描かれた「海辺のカフカ」について、村上春樹は中国版のまえがきで「主人公の少年は変化する存在として、魂はまだ一つの方向へ固定していないため、価値観とか生活スタイルというものも確立していない。しかし、彼らの体は急速に成熟に向かつて成長していく。」^二と述べた。この「成熟」は必ずしも思春期の生理的な成熟ではなくて、一種の総合的な「成熟」だと認識すべきだろう。市川浩はこの時期について「孤独を非常に鋭く感ずる時期であると同時に、他者

との直接的な深い結びつきを求める恋愛と友情の時期」と提示した一方、体の面では「この時期は体が急に成熟する時期であるから、自分の体の成熟をもてあます。(中略)いろいろな欲望がこの時期には強くなっていくわけだが、そういう欲望があらわに外面化されるのを恥じて隠そうとする」^三と指摘していた。そういう矛盾した状態があるからこそ、体と精神は錯綜的、分離できない錯綜体だと思える。そして、思春期のこの身心の矛盾がもし拡大されるなら、様々な病的な症状が出てくる。成人患者は異常に従順な人間という印象を周りの人々に与えるが、事態によっては、突然攻撃的な行為をする場合もある。総合的に見ると、このような症状は身心が別々に作用するのではなく、互いに影響しあい、外部の事態と環境によつて、ひとつの「錯綜体」として生きている身体から発生したものと認識するのがよいと思われる。権力がさまざまな規制を与えるのは、実は精神と肉体が融合して互いに影響しあう「錯綜体」としての身体であろう。

近代哲学の原点といわれるデカルトの「我思う、ゆえに我あり」は、精神と身体を両立させ、「思い」の地位を第一位に押し上げ、ただの存在にすぎない身体を第二位に置く。このような二元論的な考え方によつて、精神と身体をわけて検討する傾向があり、特に意識と身体の間を無視する場合が多い。本論は、この二元論的な考え方を超え、身心一元という身体論の立場から、村上春樹の長編小説「海辺のカフカ」における権力、規制、反抗、記憶などのキーワードを中心に、考察しようと思う。

二 権力に支配された身体

「海辺のカフカ」において、身体をめぐる、一つ注意しなければならぬ存在がある。それは、権力である。フーコーによれば、古典時代から、「身体は権力の対象、目標として、支配されたり、構築されたり、訓練されたりして、それ自体は服従的になり、権力に協力し」^四、服従する従順な身体を作り上げることが可能である。このテキストにおいても、権力に支配された身体がいくつかの形で存在している。

(一) 国家権力に規制された身体

まずは国家権力に規制された身体が見られる。村上は「海辺のカフカ」で中田君の物語を語る時、わざと「米国陸軍情報部」機密資料の文体を作り、読者に本当に発生した事件を語っている感じを与える効果を図ろうとしている。「米国陸軍情報部」をはじめ、国家権力機関が制作した資料で、中田君の物語を始めるのは、興味深いところだと思える。なぜ少年時代の中田君（後のナカタさん）に関連するこの「集団昏睡事件」（身体に関する事故）は国家の資料にあるのだろうか。資料では、多くは当事者の証言と談話であり、特に子供たちが意識を失った現場について、何人かの見聞が記録されたのである。岡持先生（第二章、第二章）、遠山軍医、塚山教授（第八章）たちは各自の視点から、昏睡した子供の表情、目、肢体などについて詳しく述べている。実際にはこの奇妙な事件で露呈した身体の様相は、常識的にも、医学的にも、人々に理解でき

ない身体、あるいはその身体の状態である。機密資料の形で現れた権力は、こういう非常態の身体を「機密資料」として隠そうとする。その意図は、学校が図る規制と訓練の役目と同じく、非正常なものを取り除くところにある。中田君のことが機密資料として記録されるということは、権力が身体を規制する一つの表現だと言えよう。

こういう身体の非常態が出てくる直接の原因は女教師岡持先生にあるが、彼女自身も権力が規制する対象にすぎない。第二章では、精神病専門の塚山先生への手紙に、彼女が事件の真実を告白したように、「当時は戦争中でもあり、思想的な締めつけも強く、そうそう簡単には口にはできないこともありました」（上一六八頁）。「思想的な締めつけ」として現れている「精神への規制」は、実際は、一種の「身体への規制」だとも考えられる。市川浩は「身体が精神である。精神と身体は、同一の現実につけられた二つの名前にほかならない」^五と強調している。ここでは、権力は精神と身体、いわゆるこの「同一の現実」に規制と圧力を与えたあげく、岡持先生に性欲を抑制させる。結果として、無意識の夢で、性欲は解放された。「お椀山」で発生した「集団昏睡事件」の前夜、岡持先生は自分の夫との激しい性交の夢を見た。彼女は「ありありと切実に」^六「ときどき夢と現実の境目がみさだめられなくなる」（上一六九頁）と述べた。性欲への抑圧は到底岡持先生がみずからに課したことはない。それは当時の権力当局が、国民の身体に課した規制である。「夢と現実の境目の曖昧さ」は身体への規制が崩壊したとき、常態の身体が暴露されている表現だと言っても過言ではない。血がついた手拭いは恥辱の象徴

的な意味を持っている一方、権力からの欲望の解放という意味も持っていると思われる。

(二) 父権に制御された身体

「海辺のカフカ」には、国家権力というような巨視的な権力形式のほか、もう一つ言及しなければならない存在がある。その「父の予言」が象徴する父権である。東京から離れて、疎開先にいる少年時代の中田君について、岡持先生は「工場で働く人がねじ回しを持って、ベルト・コンベヤで運ばれてくる部品の決められたねじを一巻きするのと同じ」(上一七五頁)ような日常生活をしていると、述べた。中田君は普通の子どものような天真爛漫な性格を持たず、彼の身体は権力の場の中で機械化されてしまった。

カフカ少年の彫刻家の父が象徴する父権は、「予言」という形を通して少年の身体を制御する。予言は根本的に、一種の「言説」(discourse)の抽象的な表現にすぎないと思う。この「言説」も「権力／知」(power-knowledge)の一種の表現形式である。「父を殺し、母と妹と交わる」という予言は、呪いのように、カフカ少年の意識に深く潜り込む。カフカ少年の意識の分身としての「カラスと呼ばれる少年」は、次のように述べた。

予言は暗い秘密の水のようにいつもそこにある。

ふだんはどこか知らない場所にこっそりと潜んでいる。しかしそ

れはある時が来ると音もなくあふれ出て、君の細胞のひとつひとつを冷やかにひたし、君はその残酷な水の氾濫の中で溺れ、あえぐことになる。君は天井近くにある通気口にかじりついて、外の新鮮な空気を必死に求める。しかしそこから吸いこむ空気はからからに乾ききって、君の喉を熱く焼く。水と渇き、冷たさと熱という対立するはずの要素が、力を合わせて同時に君に襲いかかる。(上一六頁)

ここでは「予言」を「秘密の水」と比喩するのが、「言説」というものの流動性と無形性より、むしろ権力の規制がどこにもあることを示唆していると考えられる。父の予言にあたる「言説」は「音もなくあふれ出て」、カフカ少年の「細胞」をひやす。ここでは、権力は身体の隅々まで浸透する様子が明らかに表されている。この浸透は、「新鮮な空気を必死に求める」身体に生きるチャンスさえも与えない。権力は容赦なく、身体を自分の権威のもとに収めようとする意図が、明瞭である。

この隠喩的な描写は、フーコーの観点とある程度似ている。権力の具体的な表現形式は「言説」であって、個人は毛の穴まで権力に監視され、規制される。思春期は自我を樹立しはじめる時期で、自由な身体は変化の可能性を多く秘めているが、権力が呪いのように少年の運命を厳しくコントロールしている。

(三) 暴力へ走った権力と身体

右に述べたそうした身体と権力の対立では、時々、権力は「暴力」の

形で、身体に干渉し始めた。まず「集団昏睡事件」では、中田君が血のついた手拭いを持って先生に近づくと、岡持先生は中田君に暴力をふるうことになった。岡持先生はその時の心境を次のように述べた。

気がついたとき私はその子を、中田君を叩いていました。肩のあたりをつかんで、何度も何度も平手で頬を張っていました。何か叫んでいたかもしれませんが。私は混乱していました。明らかに自分を失っていました。私はきつと深く恥を感じ、ショックの中にいたのだと思います。それまで子どもを叩いたことなんて一度もありません。でもそこにいるのは私ではありませんでした。(上二七二頁)

国家の皇民政策、皇民教育に身にしみるほど影響された岡持先生は、戦時下に夫を見る夢を恥と思い、その恥を中田君にさらされたときに、激しい怒り、そして暴力へと走ってしまった。岡持先生の激しい怒りは、ある意味では身心の同一性を持たない結果かもしれない。右の引用文では、分裂したふたりの「私」がいることは明らかである。一人は自分を失った暴力をふるう「私」、もう一人はもともとの「私」、このふたりの「私」の分裂によって、怒りを生じ、最後に、暴力へと発展していった。

また、被害者の中田君は家庭内でも「内向した暴力」を受けたことがあった、と岡持先生の手紙から暗示されている。この「内向した暴力」は、実際にあのカフカ少年の「父の呪い」と変わらないものだと思う。岡持先生によれば、中田君の父は「大学の先生」、母は「高い教養を備え

た方」であり、両親とも知識人であると推測できる。これについて、岡持先生はこう述べている。

もしそこに暴力があったとしたら、それはおそらく田舎の子どもたちが家の中で日常的に受ける暴力とは異なった、もっと複雑な要素を持つ、そしてもっと内向した暴力であったはずですが。子どもが自分一人の心に抱え込まなくてはならない種類の暴力です。(上二七七頁)

この「内向した暴力」は、知識を持つている両親が発するものであり、フーコーの「権力／知」というシステムとよく似ていて、いわゆる知識は権力を生じることを意味している。こういう暴力の形はちやうど分身としてのカフカ少年が受けた父からの「暴力」(父の予言)と照応している。中田君が受けた暴力の源はそのような知識から発する権力に違いないと思われる。国家権力機関が作った機密資料と同じく、「権力／知」は物事を極めて細分したり、収めたりすることをやる。カフカ少年と中田君など思春期にいる身体を厳しく規制するのである。

権力は、規制する最終的目標は「身体」であり、権力に対する「従順な身体」を作りあげるために、学校、軍隊のような規制機関を通して、身体の様々の側面を改造したり、訓練したりするのである。戦争中の「集団昏睡事件」は、「学校」の場で行われ、軍隊の文書で記録され、一見し

て、神秘的かつ難解な事件のように見えるが、裏には、権力の身体に対する支配、規制が働いているのである。小森陽一氏は昏睡事件の原因について、性欲を持つている女性に転嫁させようとする村上春樹の意図が見られる^六と指摘しているが、むしろその暴力の背景にある「権力」の存在が原因になっていると考えられよう。「権力」の主体として、テキストにはあまり明記されていないが、偶数章の「秘密インタビュー」と「報告書」の文体には「権力」の影が差しているのではないかと推測できる。

以上考察してきたように、権力は国家権力、父権Ⅱ父の予言（言説）の形式を通して、身体を自分の傘下にコントロールし、従順の身体を目標とし、規制していく。もともと極端的な場合は、「暴力」の形で現れる。カフカ少年は父権の重圧から逃げ出すため、自分探しの旅に出かけた。彼の分身としての思春期にいる中田君は家庭内の「内向した暴力」を受け、岡持先生の暴力を契機に、身体に大きな変化をきたし、記憶は失われた。両方とも権力の規制の被害者である。

三 権力に抵抗する身体

「海辺のカフカ」において、身体は権力によって制御され、規制訓練される一方、権力への抵抗もしばしば見られる。

(一) 「父の呪い」から脱走する身体

カフカ少年は、十五歳の誕生日のとき、家出をして、遠くの知らない

四国の小さな図書館の片隅で暮らすようになった。カフカ少年の家出は「父の呪い」から逃げようとする方法だと言えよう。前章にも述べたように、権力は主に、身体を規制することを通じて、カフカ少年を「父の呪い」から逃げられないようずっと作用している。カフカ少年の「父の呪い」から脱走しようとする努力は、権力に対するある程度の抵抗だと言えよう。

脱走するためには、まず肉体を鍛える準備が必要である。カフカ少年は十五歳の誕生日が「家出をするにはいちばんふさわしい時点」だと思っている。十五歳は思春期の最中で、変化の可能性がもつとも多い時期である。カフカ少年は家出をする前に、「時間があればひとりでグラウンドを走り、プールで泳ぎ、区立の体育館にかよって機械を使って筋肉を鍛えた」、「日々の運動のおかげで肩幅も広くなり、胸も厚くなった。知らない人の目にはじゅうぶん17歳には見える」（上133頁）。肉体的な準備は完成したようである。

が、「父の呪い」の力に抵抗しようとするれば、肉体と精神の全面的な準備が必要である。

家出する前に、カフカ少年は洗面所で鏡に向かい、自分の顔と体を檢視するとき、「父の呪い」について、「それは装置として僕の中に埋め込まれている」と思い、自分の身体の中に父から遺伝した顔、またその延長線にある「呪い」を「追い払いたければ、僕自身を僕の中から追放するしかない」（上17頁）と心を決めた。この「装置」は、父から遺伝され、少年の身体の中に定着され、身体化されたのであろう。ここで「装

置」というのは、倫理的に禁止された（父を殺害し、母と妹と交わる）ことを指す一方、思春期の少年の身体からますます出てくる「欲望」を暗示するとも考えられる。「僕自身を僕の中から追放する」という考え方については、単に思春期の身体からの抑えられない欲望の外面化を恥じて隠そうとするだけではなく、ある意味でカフカ少年が「呪い」のような強制的な力に対する、自分の潜在的な抵抗感を少し浮上させたのではないかと理解してもよからう。

十五歳の少年であるカフカは、父権へ抵抗するために、父のいる家を離れ、遠く知らないところへ脱走するほか方法はなかった。遠くへ脱走する旅は、肉体的また精神的な洗礼にもなるだろう。

（二）制度化された言葉への不信感

身体の抵抗は、ときどき権力の代弁である言葉への不信感から始まる。人類は言葉を把握することによって、他の動物と区別することができる。内部世界を参照することができる。言葉は人々がコミュニケーションする道具であると共に、人類の精神的発展にも大きく貢献している。しかし、言葉は人類の発展を手助けすると共に、それ自身が制度化され、空洞化され、とうとう権力の代弁者にもなっている場合が多く見られる。このような制度化、空洞化された言葉に対する不信感を、「海辺のカフカ」において、次の個所から明白に読み取ることができる。

1 ナカタ少年が言葉に関する能力を喪失したこと。

ナカタ少年は長い昏睡から目覚めると、その識字力を喪失し、言語による抽象思考能力もなくなつた。言語能力を失つた一方、彼の体はとても健康で、そして、猫の世界の言葉に通じるようになり、現実世界と異世界との間を自由に行き来することができるようになった。人類の言語（文字）能力の喪失が彼にもたらした影響は、彼にとつて、マイナスなことばかりではなく、むしろ、ある種の自由を獲得したことも言えるだろう。

2 言葉で説明できないという表現が文中に多くみられること。

たとえば、「ことばで説明してもそこにあるものを正しく伝えることはできないから。本当の答えといふのはことばにはできないものだから」（下四一三頁）、「それも言葉では説明することのできないもののひとつだ。イエスでもノオでもない答えのひとつだ」（下四一四頁）。

言語における基本的な機能は意味伝達であるが、このくだりからは言語のこの基本機能にも疑問を呈していることがうかがえよう。

3 当時の新聞報道の沈黙及び旧日本軍の新聞検閲への批判が、明白に記されていること。

——しかし軍は、その事件がいわゆる「化学兵器」によって起こされたものではないという結論に達した。原因は不明だが、戦争

の進行には無関係なものであるらしいと。そういうことですね？
はい、そのように理解しております。(上一二二頁)

これは米軍情報部の東京帝国大学医学部教授塚山重則にたいする調査の時の会話である。アメリカ軍調査員の質問から、旧日本軍もこの集団昏睡事件について調査を行ったことが分かる。

しかし、この不可思議な事件は、当時の新聞にはいっさい報道されなかった。

おそらくは人心を乱すという理由で、報道が当局に許可されなかったのでしょうか。戦争中ですから、軍は流言飛語にたいへん神経質になっておりました。戦局は思わしくなく、南方でも撤退、玉砕が続いております。米軍による都市の爆撃はますます激しさを増しております。そんなわけですから、民間に反戦機運、厭戦気運が広がることを彼らは恐れていたのです。私たちも数日後に巡回してきた警察官から、この出来事に関して無用な口外は控えるようにと強く注意を受けました。(上一五二―五二頁)

右に引用した塚山教授の陳述から、報道されなかつた理由は、明らかに旧日本軍部の事実隠蔽の意図にある、ということが分かる。旧日本軍の新聞検閲への批判はあらわに示されている。

4 米軍機密文書の権威性が一通の女教師の手紙によって挑戦されたこと。

事実を隠蔽する理由がある旧日本軍の新聞検閲にたいして、アメリカ軍にはその理由が見つからない。アメリカ軍の記録には信憑性があると思わせられる。次の何箇所は、いずれも信憑性を強調するためのものだと考えられる。

当文書はアメリカ国防省によって「極秘資料」として分類され保管されていたものであり、情報公開法に基づき1986年に一般公開された。現在ワシントン特別区のアメリカ国立公文書館(NARA)において、閲覧可能となっている。(上一二〇―二二頁)

いかにも改まった言葉で綴られた米軍記録である。記録要素としての作成年月日、英文タイトル、文書整理番号など、記録形式において、非常に正式で、整った形をとっている。これは、資料の公認されたこと、権威性のあることを表明しているといえよう。

そして、被調査者の身分、年齢、外観の印象など、詳細に、しかも客観的なふう々に記述されている。特に、被調査者が発問者に与える誠実な印象を、「質問者ロバート・オコンネル少尉による所感」として、陳述内容の前に記されている。

① 〈岡持節子は顔立ちのいい小柄な女性である。知的で、責任感も

強く、質問に対する答えは的確で誠実である。(傍線は引用者、以下同)(上二二頁)

②(中沢医師は大柄な体形と日焼けした顔のせいで、医師というよりはむしろ農場監督のような印象を人に与える。人当たりは穏やかだが、しゃべり方はきびきびとして簡潔である。率直に思ったことを口にす。眼鏡の奥にある眼光は鋭い。記憶力は確かなものであるようだ)(上四二頁)

③(塚山教授はいかにも専門家らしい落ち着いた態度を保っている。彼は精神医学の分野では日本を代表する学者であり、これまでも何冊かのすぐれた書物を発表している。(中略)事実と仮説とを明確に峻別する。(中略)多くの人は彼に信頼感と好感を抱くだろう)(上二〇三頁)

右の文書に見られる制作者の工夫は、記録された文書の信憑性を高めることを狙っていることが明らかであろう。しかし、そこで書かれた事件のいきさつは、真実の核心に突きとめることができなかつた。つまり、事件解明には至らなかつた。それどころか、二八年後事件当事者の女教師からの一通の手紙によって、当時の陳述に隠蔽されたことがある、と告白された。ここまで来て、権威性を誇る米軍文書の信憑性も疑わざるを得なくなつた。

5 佐伯の手記が焼却されたこと。

「私はそのような出来事のすべてを、ここに細かく書き記しました。私は私自身を整理するためにこれを書いてきました。私は自分がなにもものであり、どのように人生を送ってきたのか、それをもう一度隅々まで確認しなかつたのです。もちろん私以外の誰を責めることもできないのですが、それは身を切るようにつらい作業でした。しかしその作業もようやく片づきました。私はすべてを書き終えました。」(下二九二頁)

佐伯自身が言っているように、手記は自己確認のために書かれているものである。それまで空っぽになつた自分をもう一度埋め満たすためには反省の意味も含めていよう。ゆえに、それは「つらい作業」である。いくらつらくても、手記を続けてきた佐伯には、自己整理の必要性がうかがえる。

ここで、手記を書くということは、佐伯の精神上的の整理に大きな役割を果たしているといえよう。しかし、つらくても、書き続けて最後まで、書いてしまったものを、佐伯は焼却することに決めた。それはなぜだろう。

「書くということが大事だったのでですね？」とナカタさんは尋ねた。「はい。そのとおりです。書くということが大事だったので。」

書いてしまったものには、その出来上がったかたちには、何の意味もありません」(下二九二―二九三頁)

「こんなものは私にはもう必要ではありません。またほかの誰にも読まれたくはありません。もし誰かの目に触れたら、また新たに何かを損なってしまうことになるかもしれません。ですから、これをご自分で完全に焼き捨てていただきたいのです。あとかたも残らないように。それを、もしできることなら、ナカタさんにお願いたいのです。私にはナカタさんしか頼るべき人は居ません。」(下二九二頁)

書くこと、書く過程が大事だが、その結果、書かれたものには意味がないというのである。ここでは、書かれたものが書く本人に意味がないというのみならず、他人にも意味がないという。それどころか、書かれたものが他人に損失を与える可能性もあると恐れてもいる。

ここで、公開するつもりのない手記を書くことは、まだ個人がコントロールできる範囲のことであるが、個人的なものがいったん公になると、権力というものに左右される可能性が大きく、その場合、個人の意志に反した方向に使われ、他人に損失を与えてしまう可能性があるため、他人に伝える必要がないと決めた、と理解してもよからう。言語それ自体の伝達機能は否定されてはいないが、制度化、空洞化された言葉の伝達機能は最初から拒否されていたのである。

以上見てきたように、このテキストの中に、真実を伝えることのでき

ない言語、特に、旧日本軍の事実隠蔽を図る新聞記事、アメリカ軍が制作した機密文書のような明らかに権力に操られた言語に対しては、著しい不信感が表されている。あくまでも個人的な手記の公開も拒否するが、それも権力の参与、支配を恐れているからであろう。

このテキストで表現された言葉への不信感は、小森陽一氏から厳しく批判された。氏は「言葉を通して、『精神』としての人と人とのかわりあいの契機が完全に息の根を止められている」と指摘し、権威に対する批判、歴史に対する反省も言語の解消によって、不可能になり、結局、「自我に対する処刑は、小説という表現手段それ自体に対する処刑でもある」とし、「歴史の否認、歴史の否定」がこのテキストに「内在している」と批判している⁷。

しかし、そもそも村上にはこのテキストにおいて、歴史、記憶を否認する意図があるのだろうか。

「僕らはみんな、いろんな大事なものをうしないつづける、(中略)大事な機会や可能性や、取りかえしのつかない感情。それが生きることのひとつの意味だ。でも、僕らの頭の中には、たぶん頭の中だと思っただけで、そういうものを記憶としてとどめておくための小さな部屋がある(傍線は引用者、以下同)。きっとこの図書館の書架みたいな部屋だろう。そして僕は自分の心の正確なありかたを知るために、その部屋のための検索カードをつくりつづけてはならない。掃除をしたり、空気を入れ換えたり、花の水をかえたりす

ることも必要だ。言い換えるなら、君は永遠に君自身の図書館の中で生きていくことになる。」(下四二二頁)

「心の正確なありかたを知るために」、その記憶をたどる必要があるという。つまり、記憶は、人の精神を正確な方向に保つために不可欠なものでもある。したがって、毎日図書館をきれいに、正常に維持するために、掃除したり、花の水をやったりするように、記憶を大事にする必要がある、と村上は大島の口を借りて、主張していることがわかる。それでは、こういう大事な記憶は、言語を通してではなく、どういう方法で保存されているのだろうか。村上は、言語の代わりに、身体というルートを用意した。

(三) 言葉の代行としての身体による記憶

上述のように、村上はこのテキストにおいて、歴史、記憶というものを否認するのではなく、身体という通路を通して、人が正確に生きていくために不可欠な記憶を保存し、伝達するのである。

1 空っぽになった身体による記憶

ナカタは少年時代、お椀山で発生した集団昏睡事件で、かつての記憶をすべて失った。彼の記憶喪失について、従来の研究は村上の歴史否認とつながっていると主張している⁶⁾。しかし、筆者が注目したいのは、同じく集団昏睡事件で記憶を失ったほかの少年たちとナカタとの違いであ

る。

——そのナカタという男の子を別にすれば、子どもたちにはその後何の症状も残らなかったのですか？

はい、(中略)山の中で2時間も意識を失ったという異様な体験をしていながら、子どもたちの精神にも身体にも痕跡ひとつ残ってはいません。(傍線は引用者、以下同)(中略)子どもたちはいつもの日常に戻り、何の違和感もなく生活をおくっていました。授業を受け、歌を歌い、休み時間には元気に校庭を走り回っていました。(上五〇〜五一頁)

軍医の渡してくれた資料からわかるもつとも重要な特徴は、医学的に見れば、子どもたちには何の影響も残っていないということでした。(中略)子どもたちは事件が起こる前の状態とまったく同じ状態で、きわめて健康に生活を送っていました。(中略)ただ子どもたちの頭からは、山の中で意識を失っていた2時間分の記憶が失われていました。(上二〇五〜二〇六頁)

ほかの少年たちは昏睡から目覚めるまでそれほど時間がかからなかった。それに、失った記憶は事件それ自体に関するものしかなかった。その後、何の影響もなく日常にもどり、健康に生活している。

対して、ナカタは昏睡から目覚めるのは二週間後のことである。

彼の頭からすべての記憶が失われていることが判明しました。自分の名前さえ思い出すことができないのです。自分の住んでいた場所も、通っていた学校も、両親の顔も、なにひとつ思い出せません。字も読めません。ここが日本であり、地球であるということもわかりません。日本が何であり、地球が何であるということすら理解できません。彼は文字通り頭をすつからかんにして、白紙の状態での世界に戻ってきたのです。(傍線は引用者)(上一一五頁)

ナカタ少年は意識は戻ったが、ほかの少年と異なつて、元通りにはならなかった。彼は事件当時の記憶のみならず、すべての記憶を失い、文字読みもできなくなり、抽象思考能力も失つたのである。

ほかの少年たちは事件当時の記憶だけを失い、そのあとは何事も起こらなかつたように、健康に生活しているのに対して、ナカタには、明らかに、事件の後遺症が残っている。ナカタは事件前とまったく変わったため、当時の事件調査に参加した塚山教授はナカタのことは「きわだった例外事項」であり、「事件の真相解明の鍵になる」と考えた。それに、ナカタに暴力を振るつた女教師はいつまでも悔恨の意を抱え、その事件から解放されなかつた。ナカタのこうした事件後遺症、つまり、事件前との身体の変化は、むしろあの事件に対する一種の記憶の形式になつたといえよう。

空っぽになつたという記憶の形は、佐伯についても言える。

私にとつての人生は20歳のときに終わりました。それからあの人生は延々と続く後日談のようなものに過ぎません。それは薄暗く曲がりくねつた、どこにも通じない長い廊下のようなものです。しかし私はそれを行き続けなくてはなりませんでした。空虚な一日いちにちを受け入れて、空虚なままに送り出していくだけです。(傍線は引用者)(中略)すべては意味のないことでした。すべてがあつと言う間に過ぎ去つてしまい、後には何も残りませんでした。(下二九一〜二九二頁)

佐伯は六〇年代の暴力事件で亡くなつた恋人に対する記憶のなかにか生きておらず、その後の生活はすべて空虚だと思つている。つまり、佐伯も空っぽになつたのである。ナカタのように思考力までなくなつたわけではないが、精神的には空白状態なのである。後日談のような生活は、佐伯が亡くなつた恋人への記憶からまったく解放されない印であり、言い換えれば、佐伯の恋人への記憶は、ナカタと同じく、空っぽになつたという形を呈している。

2 身体による記憶の伝達

佐伯の手記をナカタは読めない。ゆえに、佐伯の記憶は手記に書かれた言葉によって、ナカタに伝わることはできない。しかし、ナカタには、佐伯の思い出を感じる事ができた。

ナカタさんは静かに椅子から立ち上がり、佐伯さんの座っている机の前に行った。そしてファイルの上に置かれた佐伯さんの手の上に、自分の硬く日焼けした手を重ねた。(傍線は引用者、以下同)そして何かにじつと耳を澄ませるようなかつこうで、そこにある温かみを自分の手のひらに移した。「サエキさん」「はい」「ナカタにも少しだけわかります」「何がですか?」「思い出というのが、どのようなものであるかがです。サエキさんの手を通して、ナカタにもそれは感じられます」(下二九三頁)

ここで、佐伯が手記で記した思い出、すなわち、記憶というものは、文字というより、身体(その一部である手)によってナカタに伝わった。「ナカタさんはいつまでも彼女の手に自分の手を重ねていた。佐伯さんはやがて目を閉じ、思い出の中に静かに身を沈めていった。そこにはもう痛みはなかった。誰かが痛みを永遠に吸い上げてくれたのだ。」(下二九四頁)。重い記憶がナカタに伝わったことによって、佐伯は精神的に解放されたようになり、癒しを感じ取った。

ところが、このテキストに現れた記憶の保存は、ナカタ、佐伯のような社会的に疎外された、いわゆる弱者たちによった。記憶の伝達もこの弱者たちの間にのみ行われている。したがって、この身体による記憶は、個人的なものから、集団的なものへと転換するのはきわめて困難であり、記憶によって喚起できる反省の力も薄弱であることは言うまでもなかる

う。

それに、「死んでしまえば、知っていることも全部なくなって消えてしまいます」(下四四頁)とナカタが言っているように、身体による記憶は、いつか身体消失とともに、消えてしまうことが明らかであろう。

村上がこのテキストにおいて試みた身体という記憶のルートは、集団レベルまで伝達するには、言語の力に比べれば、明らかにまだ力不足であるといわざるを得ない。小森氏の批判を受けるのも仕方ないことであろう。

以上見てきたように、「海辺のカフカ」において、巨視的な国家権力から微視的な父権まで、権力があらゆる領域で行使されている。それに支配され、規制訓練されている身体が常に存在している。一方、積極的に権力から自由を奪還しようとしたり、権力が抹殺しようとする記憶を保存、伝達しようとしたりする身体の努力も見逃してはならない。村上がエルサレム賞授賞式での講演「壁と卵」で表した権力への挑戦は、「海辺のカフカ」にも現れていると言えよう。それに、歴史認識、歴史記憶についても、他の場合で、明らかに、戦争責任への反省、歴史を記憶する必要性を語っている⁹。村上のこうした歴史に対する反省の意思、権威への挑戦精神が明らかに存在することは、否定すべきではないが、「海辺のカフカ」において、試みた身体という記憶のルートの有効性については、反省すべきではないかと思わざるを得ない。

Butler, Judith. *Bodies that matter: on the discursive limits of "sex"*.

Routledge. 1993. 3.p.29. 日本語訳は引用者。

二 村上春樹『海邊的卡夫卡』中文版序 林少華訳 二〇〇七年七月 上海訳文出版社 日本語訳は引用者。

三 市川浩『精神としての身体』 講談社 一九九五年七月 一五〜一六頁

四 福柯著、劉北成、楊遠征訳『規訓與懲罰——監獄的誕生』 生活・讀書・新知三聯書店 一九九九年八月 一五四頁 日本語訳は引用者。

五 同注三、一九六頁

六 小森陽一『村上春樹論——「海邊のカフカ」を精読する』 平凡社 二〇〇六年五月 一九一、一九五、一九九頁

七 同注六、一四六、一七六、一九九頁

八 たとえば、小森陽一氏は、注六に挙げている同著作の一九九頁で、このテキストに現れる歴史否認を指摘している。

九 都甲幸治「村上春樹の知られざる顔——外国雑誌インタビューを読む」(『文学界』二〇〇七年七月)によれば、村上春樹は作品『ねじまき鳥クロニクル』に関する外国雑誌のインタビューに対して、「父親の世代がやったことに僕たちは責任があります。彼らの生み出した記憶を僕たちも共有しているからです。戦争中になされたことに僕たちは責任があります。こうした残虐行為について書いた理由はそれなんです。そのことについて、思い返し、記憶にとどめる必要が僕らにも

あるんです」と語っている。

※本文引用はすべて村上春樹『海邊のカフカ』(上・下)(新潮社 二〇〇二年九月)に拠るものである。